広野文芸欄

季題　当季自由句

広野町弥生句会

山田　基星

通学の児等のかばんに春ひかり
風ひかり孫のリボンの流るるや
彼岸入りだんごをにぎる祖母の背な

塩　史子

仏間よりほのかに香る沈丁花
海近し山に真紅の藪椿
幼稚なる鳴き方嬉し初音かな

西山子

越河（こすごう）に電車留（とど）める春嵐
吾妻嶺の白さうすめる春霞
朗報を知らせる姪の声や春

根本　山水

雪溶けの水面に揺れる月の影
山々の霞かかりて残り雪
白鳥の飛び立つ彼方見送りて

鯨岡　一生

野仏のうしろ姿も長閑なり
花祭り老も若きも声高し
鶯の初音をきき挟庭かな

遠藤健太郎

あれやこれ庭いじりして暮れかぬる
薹立ち菜小さき籠に溢れけり
味噌和えの蕗出る夕餉かな

鯨岡　正子

ゆづ風呂であと何年と指かぞい
こぼれ日に春のぬくもり感じけり
春彼岸遠き友より電話あり

阿部　真生

芹をつみ笑顔で戻る妻なりし
髪みだれ午後の散歩の春の風
春の香を身に一杯や急ぎ足

酒井　津祢

春の海小さき入江を満たしけり
合格の電話でありしさくら草
外出（そとで）せぬ吾に芽吹くや庭の木々

宮下　純子

涼やかな目もとなりけり紙ひいな
まどろみの中にありけり春炬達
うたた寝の猫の小鈴や春うらら

広野みなづき短歌会四月詠草

（旧仮名使用　五十音順）

春彼岸名ばかりにしてこの寒さぱらつく
雪を手に払ひゆく

吹きおろすあぶくまおろしの寒き日をバスに明るくセミナーに行く
車椅子に夫と孫の二人乗り広きホテルに一泊をせり

猪狩ユリ子

一球入魂純心の投球続けるも味方のエラーに泣くこともあり
監督の眼がきらりと光りたりチャンス到来次打者に期待す

小澤　健次

可も不可もなき平凡な人生とつぶやく夫は卒寿迎えぬ
「祝卒寿」と記念品添へられ賀詞届く長寿の夫に春の来たりぬ
悩み深き友の語りに涙せり聴きいるのみにて術のなきまま

木村ミヨ子

ほのぼのと春の電車に揺れながら青春の日へ思ひのかへる
妻の忌に花を抱きて娘来る娘もしみじみと母を偲びて
離れ住む娘らを思いてひな飾るめぐる季節に一人住みつ

菅原　泰郎

人のため役立つことを思ひつつささやかなれど友らと励む
胸よぎる思ひありて春雨の今宵静かに遠き日憶ふ

田副　耕一

逢ふ度に優しき言葉かけくれし兄を恋ひつつ墓に香たく
咲き初むる黄色浮き立つ福寿草春呼ぶごとき庭の陽だまり

新田　里子

淋しさをまぎらす薬はなきものか母亡き夜中の独り居に思ふ
酒欲りて飲んでも淋し春の宵よみじの母がささやきてくる

藤田　孝夫

卒業式に付き添へゆきし息子（こ）はお土産と和服の孫の写真持ち来ぬ
袴姿の娘の卒業写真そっと置き「帰って来ぬ」と息子は言ひたり
物忘れを歎きゐし亡母に吾を重ね老人クラブの会計簿繰る

山内　洋子

サイネリア鉢より庭に移し植う花の終りの儀式となして
友ありて共に老残をすこやかに歌によりつつ心たのしむ
贈られし歌集読み終へ夕近し逢ひ得し如き人の親しさ
洋服を仕立てし端布十数年持ちきて捨つるあきらめもちて
姿崩さずうたたねをする女性ゐて電車は春の鉄橋渡る
鳥の名知らず見上ぐる吾に野の子らは速座に四十雀と名を告げくるる
美男かづら床に活けあり釜の湯はたぎりて今日のけいこ始まる

山口　歌子